博士論文（要約）

論文題目　　中世百首和歌の研究

氏　名　　野本　瑠美

（2）中世百首和歌の研究　目次

例言……1
序章……2
第一編　応制百首の研究
第一章　『久安百首』研究
第一節　『久安百首』の羇旅歌……6
第二節　『久安百首』の述懐歌……22
第二章　応制百首とその周辺
第一節　藤原教長と羇旅歌……43
第二節　藤原隆季の和歌活動……54
第二編　奉納和歌の研究
第一章　奉納和歌と『寿永百首』
第一節　奉納和歌とは何か……70
第二節　『経盛集』と奉納……95
第三節　『長明集』の贈答歌……109
第二章　「天神仮託百首」の研究
第一節　「天神仮託百首」の形成……122
第二節　実践女子大学山岸文庫蔵『天神百詠』考
1　実践女子大学山岸文庫蔵『天神百詠』に関する考察……136
2　実践女子大学山岸文庫蔵『天神百詠』翻刻……146
終章……161
初出一覧……164

（3）本文

すでに出版されていて全文公表ができない。以下、刊行した図書の書誌事項を記す。

著者名　野本瑠美
題名　中世百首歌の生成
出版社　若草書房
出版年　二〇一九年
ＩＳＢＮ　９７８－４－９０４２７１－２２－３

（4）参考文献一覧

福井久蔵『大日本歌書綜覧』（不二書房、一九三二年）
蓮田善明『鴨長明』（八雲書林、一九四三年）
松田武夫『古今集の構造に関する研究』（風間書房、一九六五年）
橋本不美男『院政期の歌壇史研究―堀河院歌壇を形成した人々―』（武蔵野書院、一九六六年）
桑原博史『中世物語の基礎的研究　資料と論考』（風間書房、一九六九年）
森本元子『私家集の研究』（明治書院、一九六六年）
島田良二『平安前期私家集の研究』（桜楓社、一九六八年）
藤岡忠美『平安和歌史論―三代集時代の基調』（桜楓社、一九七二年）
久保田淳『新古今歌人の研究』（東京大学出版会、一九七三年）
松野陽一『藤原俊成の研究』（笠間書院、一九七三年）
竹岡正夫『古今和歌集全評釈』（右文書院、一九七六年）
橋本不美男・滝沢貞夫『校本　堀河院御時百首和歌とその研究』（笠間書院、一九七六―七七年）
細野哲雄『鴨長明伝の周辺・方丈記』（笠間書院、一九七八年九月）
谷山茂『谷山茂著作集二　藤原俊成―人と作品』（角川書店、一九八二年）
谷山茂『谷山茂著作集三　千載和歌集とその周辺』（角川書店、一九八二年）

谷山茂『谷山茂著作集六　平家の歌人たち』（角川書店、一九八四年）
五味文彦『院政期社会の研究』（山川出版社、一九八四年）
井上宗雄『中世歌壇史の研究　南北朝期』改訂新版（明治書院、一九八七年）
井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』増補版（笠間書院、一九八八年）
武井和人『中世和歌の文献学的研究』（笠間書院、一九八九年）
平安末期百首和歌研究会『久安百首―校本と研究』（笠間書院、一九九一年）
『藤井寺市史』第十巻史料編八中（藤井寺市、一九九二年）
久保田淳『藤原定家とその時代』（岩波書店、一九九四年）
萩谷朴『増補新訂　平安朝歌合大成　二』（同朋舎、一九九五年）
松野陽一『鳥帯―千載集時代和歌の研究―』（風間書房、一九九五年）
三木紀人『鴨長明』（講談社学術文庫、一九九五年）
有吉保『新古今和歌集の研究　続篇』（笠間書院、一九九六年）
萩谷朴『増補新訂　平安朝歌合大成　三』（同朋舎出版、一九九六年）
萩谷朴『増補新訂　平安朝歌合大成　四』（同朋舎出版、一九九六年）
石川一『慈円和歌論考』（笠間書院、一九九八年）
安田徳子『中世和歌研究』（和泉書院、一九九八年）
浅田徹『百首歌―祈りと象徴』（臨川書院、一九九九年）
山本一『慈円の和歌と思想』（和泉書院、一九九九年）
渡部泰明『中世和歌の生成』（若草書房、一九九九年）
藏中さやか『題詠に関する本文の研究　大江千里集・和歌一字抄』（おうふう、二〇〇〇年）
山崎桂子『正治百首の研究』（勉誠出版、二〇〇〇年）
小峯和明編『宝鏡寺蔵『妙法天神経解釈』全注釈と研究』（笠間書院、二〇〇一年）
髙城功夫『西行の研究―伝本・作品・享受―』（笠間書院、二〇〇一年）
黒田彰子『俊成論のために』（和泉書院、二〇〇三年）
竹下豊『堀河院御時百首の研究』（風間書房、二〇〇四年）
近藤みゆき『古代後期和歌文学の研究』（風間書房、二〇〇五年）
中村文『後白河院時代歌人伝の研究』（笠間書院、二〇〇五年）
深津睦夫『中世勅撰和歌集史の構想』（笠間書院、二〇〇五年）
井上宗雄『中世歌壇と歌人伝の研究』（笠間書院、二〇〇七年）

金任仲『西行和歌と仏教思想』（笠間書院、二〇〇七年）
久保木哲夫『折の文学　平安和歌文学論』（笠間書院、二〇〇七年）
久保木英夫『中古中世散逸歌集の研究』（青簡舎、二〇〇九年）
小峯和明『中世法会文芸論』（笠間書院、二〇〇九年）
阿部泰郎・錦仁編『聖なる声　和歌にひそむ力』（三弥井書店、二〇一一年）
平野多恵『明恵―和歌と仏教の相克』（笠間書院、二〇一一年）
栗山圭子　『中世王家の成立と院政』（吉川弘文館、二〇一二年）
平田英夫『御裳濯河歌合・宮河歌合　新注』（青簡舎、二〇一二年）
山田昭全『山田昭全著作集３　釈教歌の展開』（おうふう、二〇一二年）

早川正道「法楽和歌の史的展望」（『東洋學研究』1、一九三一年十二月）
田尻嘉信「述懐の歌について―「有心」との関聯―」（『和歌文学研究』11、一九六一年五月）
峯岸義秋「歌合における述懐の歌」（『平安時代和歌文学の研究』桜楓社、一九六五年二月）
杉山重行「月詣和歌集の考察」（『和歌文学研究』24、一九六九年六月）
三木紀人「長明の出発とその後―父の影をめぐって―」（『国語と国文学』50‐4、一九七三年四月）
三木紀人「長明伝の暗部はさぐりうるか―恋愛体験をめぐって」（『国文学　解釈と教材の研究』22‐11、一九七七年九月）
田尻嘉信「久安百首名所考」『跡見学園短期大学紀要』15（一九七九年三月）
内藤愛子「堀河百首題述懐をめぐって」（『文教大学女子短期大学部研究紀要』26、一九八二年十二月）
辻勝美「鴨長明集成立年時考」（『語文』57、一九八三年五月）
安田純生「藤原顕輔の和歌―『久安百首』の作品について―」（『講座平安文学論究』三、風間書房、一九八六年）
柳澤良一「『久安百首』における藤原俊成の漢詩文摂取歌について」（『国語と国文学』63‐10、一九八六年十月）
内田徹「述懐歌の形成」（『文芸と批評』6、一九八七年三月）
佐藤明浩「「近頃の歌」との類似をめぐって―平安後期～鎌倉初期の意識―」（『和歌史の構想』和泉書院、一九九〇年）
河合一也「『続詞花集』旅部の配列構成について」（『語文』76、一九九〇年三月）

田中仁「「書きつく」の意味―宇津保物語を主な資料として―」（『言語表現の研究と教育』三省堂、一九九一年）
寺島恒世「後鳥羽院『内宮百首』考―奉納の意味をめぐって―」（『日本文芸思潮論』桜楓社、一九九一年）
久保貴子「山岸文庫「菅原道真家集類」に関する一考察」（『実践国文学』40、一九九一年九月）
青木真知子「神社歌合と社頭題歌（一）」（『星稜論苑』13、一九九一年十二月）
久保木寿子「初期百首と私家集―好忠百首を中心に―」（『和歌文学論集四　王朝私家集の成立と展開』風間書房、一九九二年）
小川豊生「歌徳論序説」（『鹿児島女子大学研究紀要』13-1、一九九二年三月）
青木真知子「神社歌合と社頭題歌（二）」（『星稜論苑』15、一九九二年十二月）
上野順子「『朗詠百首』について―その成立に関する試論―」（『中世文学』38、一九九三年六月）
菅野扶美「天台五時教の今様と『久安百首』俊成詠について」（『梁塵　研究と資料』14、一九九六年十二月）
小野泰央「『大江千里集』「詠懐」部と「添ふる歌」―その表現と主題について―」（『和歌文学研究』76、一九九八年六月）
京都光華女子大学鴨長明集研究会「『鴨長明集』全注解稿」（一）～（五）（『光華日本文学』7～11、一九九九年八月～二〇〇三年十月）
奥野充子「『鴨長明集』考―題詠歌の視点から―」（『光華日本文学』8、二〇〇〇年八月）
稲田利徳「藤原教長の「貧道集」と「伊勢物語」」（『岡山大学教育学部研究集録』115、二〇〇〇年十一月）
下郡剛「伝奏の女房　高倉院政期の性と政」（『院政期文化論集一　権力と文化』森話社、二〇〇一年）
榊原照枝「後鳥羽院の北野信仰―『新古今和歌集』雑歌下巻頭の道真歌群を中心に」（『語文』109、二〇〇一年三月）
田野慎二「和歌を柱に書きつけるとき―「題壁詩」の影響と柱信仰とに注目して―」（『人間研究論輯』1、二〇〇一年十二月）
寺島恒世「和する営み―後鳥羽院『正治初度百首』の改作をめぐって―」（『平安朝文学表現の位相』新典社、二〇〇二年）

石川一「二見浦百首」作者の再吟味―『御裳濯和歌集』『二見浦百首拾遺』の関係を焦点として―」(『国語国文』71‐1、二〇〇二年一月)
福留瑞美「阿仏尼の天神信仰―『安嘉門院四条五百首』の「えがらの宮の百首」に見る」(『国文学』83・84、二〇〇二年一月)
佐藤恒雄「御子左家三代の悲願」(『香川大学教育学部研究報告』117、二〇〇二年十一月)、
浅田徹「菅原道真の新古今入集歌おぼえがき」(『早稲田本庄高等学院国語科論集』創立二十周年記念特別号、二〇〇三年三月)
平藤幸「藤原隆季像の考察―『玉葉』からの照射を軸に―」(『軍記と語り物』39、二〇〇三年三月)
渡辺麻里子「嵯山元賢の天神信仰―道明寺天満宮蔵『瑠璃壺之詠歌百首』をめぐって―」(『黄檗文華』122、二〇〇三年七月)
寺島恒世「王者の〈抒情〉歌―後鳥羽院の奉納三十首歌の性格」(『国語と国文学』81‐5、二〇〇四年五月)
田渕句美子「敗者たちの風景―勅撰集を中心に―」(『中世文学』49、二〇〇四年六月)
浅田徹「書くことの呪術」(『和歌が書かれるとき』岩波書店、二〇〇五年)
小川豊生「和歌と帝王―述懐論序説あるいは抒情の政治学へ向けて―」(『和歌の力』岩波書店、二〇〇五年)
平田英夫「円位聖と両宮歌合―世のはじまりを思う詩想」(『文学』6‐4、二〇〇五年七月)
芦田耕一「藤原清輔詠の『和漢朗詠集』の漢詩摂取」(『島大言語文化』19、二〇〇五年九月)
加藤睦「藤原定家「二見浦百首」覚書」(『立教大学大学院日本文学論叢』5、二〇〇五年十一月)
佐々木孝浩「後鳥羽院と恋歌―和歌と信仰の関係をめぐって―」(『明月記研究』10、二〇〇五年十二月)
谷知子「後鳥羽院と元久元年十一月十日「春日社歌合」―和歌所で神社奉納歌合を催すということ―」(『明月記研究』10、二〇〇五年十二月)
飯塚ひろみ・三浦喜子・吉海直人「道真仮託歌集『菅家御集』の翻刻と紹介」(『同志社女子大学日本語日本文学』18、二〇〇六年六月)
中村文「藤原隆信の二見浦百首詠」(『埼玉学園大学紀要　人間学部篇』6、二〇〇六年十

二月）
久冨木原玲「平安和歌における神と仏―袋草紙「希代の歌」を手がかりに―」（『王朝運学と仏教・神道・陰陽道』竹林舎、二〇〇七年）
石川一「慈円諸社法楽百首群の「基底」―愚管抄・自筆願文・拾玉集などの整理を通して」（『県立広島大学人間文化学部国際文化学科紀要』2、二〇〇七年三月）
細川知佐子「俊成の『久安百首』「春」と「秋」の歌材と構成―顕輔との比較を中心に―」『国語国文』76-10（二〇〇七年十月）
安井重雄「道因勧進『住吉社歌合』『広田社歌合』の詠歌の性格」（『和歌文学研究』95、二〇〇七年十二月）
飯塚ひろみ・芝万智・吉海直人「道真仮託歌集『聖廟御詠』の翻刻と紹介」（『同志社女子大学日本語日本文学』20、二〇〇八年六月）
久保木哲夫「『頼輔集』考―寿永百首家集と『月詣和歌集』―」（『和歌文学研究』97、二〇〇八年十二月）
安井重雄「嘉応二年住吉社歌合判詞考」（『龍谷大学仏教文化研究叢書24　中世の文学と思想』龍谷大学仏教文化研究所、二〇〇八年十二月）
安井重雄「道因勧進『住吉社歌合』『広田社歌合』の奉納と位署と俊成」（『国語国文』78-7、二〇〇九年七月）
佐藤道生「平安時代の詩序に関する覚書」（『平安文学史論考』武蔵野書院、二〇〇九年）
近藤みゆき「相模集所載「走湯権現奉納百首」試論―誰が「権現返歌百首」を詠じたか―」（『国文目白』49、二〇一〇年二月）
佐藤明浩『『久安百首』部類本の編纂について」（『日本古典文学研究の新展開』笠間書院、二〇一一年）
佐藤明浩『『久安百首』部類本考―配列構成について―」（『文科の継承と展開』勉誠出版、二〇一一年）
佐藤弘夫「中世における神概念の変容」（『中世神話と神祇・神道世界』竹林舎、二〇一一年）
拙稿「藤原隆季の和歌と詩文摂取」（中世の文学『校訂中院本平家物語（下）』附録38、三弥井書店、二〇一一年）
錦仁「和歌はなぜ〈声〉なのか―『古今和歌集』仮名序から」（『聖なる声　和歌にひそむ力』三弥井書店、二〇一一年）

安井重雄「社頭歌合の課題構成と位署」（『典籍と資料』思文閣出版、二〇一一年）
佐藤明浩「御裳濯河歌合の構成と俊成入道の判」（『国文学　解釈と鑑賞』76-11、二〇一一年三月）
平成二十一年度　皇學館大学神道研究所公開学術シンポジウム「神社奉納和歌研究の現在」（『皇學館大学神道研究所紀要』二七、二〇一一年三月）
高橋秀城「参詣と和歌」（『中世の寺社縁起と参詣』竹林舎、二〇一三年）
浅田徹「後鳥羽院と神―新古今集に託されたもの―」（『国学院雑誌』114-8、二〇一三年八月）
石川一「西行「諸社十二巻歌合」の考察：『伊勢瀧原社十七番歌合』所収歌の分析を通して」（『国語国文』82-11、二〇一三年十一月）

（5）論文の内容の要旨

本論文は「百首和歌」と呼ばれる詠作形態が持つ特徴の解明を目的とする。百首和歌とは、百首を一単位として詠む和歌の詠作形態のことで、天徳四年（九六〇年）成立の『好忠百首』に始まり、十二世紀初頭の『堀河百首』を画期として、中世、公的な場で和歌を詠進する際の最も重要な形態として定着していった。先行研究では個々の作品に即した考察が進展し、特に『堀河百首』や、新古今時代の後鳥羽院や定家、慈円らの百首和歌などに注目が集まっているが、百首和歌という詠作形態自体がもつ特質についてはいまだ統一的な見解が成立していない。このような研究状況を踏まえ、本論文では百首和歌という詠作形態がいかなる条件を詠者に課すものなのか、また詠者の創造力をどのように刺激するものであったのかを個々の作品の分析を通して検討することを目指した。具体的には、中世百首和歌において最も重要な詠作契機である「応制」と「奉納」の両面から百首和歌の特質を見出だそうとした。

第一編は応制百首に関する論考から成る。応制とは天皇や上皇の命令による詩歌の詠進のことで、堀河天皇の下命とされた『堀河百首』以来、百首和歌の重要な詠作契機と位置づけられた。本論文でとりあげる『久安百首』は崇徳院の命令により、久安六年（一一五〇年）におおよその完成をみた応制百首である。これまで『久安百首』は『堀河百首』の影響下にある作品として、俊成の詠作を除けば、それほど重視されてこなかった。だが、その後の中世和歌の好尚の方向性を決定づけるような内容を持つことが考察により明らかとなった。

第一節では『久安百首』の羇旅部について考察し、従来の題詠では主題となり得なかった「旅」を主題として位置づけたこと、旅宿詠が中心であった『堀河百首』の「旅」題詠に比べ、多様な旅の様相を描くことを志向するようになったことを明らかにし、題詠の羇旅歌の転換点となる作品であったと指摘した。このような転換が『千載集』以降の羇旅部の方向性を決定づけたのであった。

第二節では『久安百首』雑部の「短歌」に着目し、不遇沈淪を訴嘆する『堀河百首』の「述懐」題詠にくらべ多様な「述懐」が見られること、主催者である崇徳院を寿ぎ、百首作者に加えられた喜びや謙辞が目立つことを指摘した。このような「短歌」の内容は、『古今集』などに見られる「短歌」や詩序の「述懐」の方法に近似すると考えられる。また『久安百首』では「短歌」部だけでなく百首全体のバランスの中で、不遇沈淪の嘆きと主催者

への慶賀等の配置が考慮されていることを明らかにした。そして、『久安百首』における「短歌」部設定は臣下の嘆きを受け止めようとする崇徳院の意志を反映したものであり、そのような志向は臣下の訴嘆を受け止めた堀河天皇の姿に倣ったものであるという見通しを述べた。

第二章では、『久安百首』歌人である二人の廷臣に着目し、応制百首の周辺で行われた和歌活動から応制百首の役割を逆照射しようと試みた。

第一節では崇徳院の近臣であった教長の羇旅歌について、保元の乱後の配流により教長の羇旅歌の主題が風雅なものから辛苦を詠ずるものに一変すること、そして、教長の辛苦の羇旅歌がその後の題詠の旅歌の詠法に影響を与え、『久安百首』で芽生えた題詠の羇旅歌の進展を後押ししたことを指摘した。

第二節では藤原隆季の若年期から晩年までの和歌活動を概観し、平安時代末期の官人にとっての詠歌の意義を考察した。従来、風雅への志向という側面が強調されてきたが、隆季にとっての和歌が立身出世（特に兄弟間での競争や子息の教育）に重要な役割を果たしていたことを、隆季の伝記と重ね合わせることで明らかにした。

第二編は寺社に奉納された「奉納百首」に関する論考から成る。

第一章第一節では、従来用語も定義も曖昧なままであった「奉納和歌」について、「法楽」を含めた広義「奉納」という概念を提唱し、平安期の和歌から「奉納」と呼び得る事例を収集した。その結果、寺社に歌集や歌合、定数歌を納めるだけが「奉納」なのではなく、奉納物や聖域内の物に和歌を書きつける行為や参詣途上で詠まれる和歌も「奉納」としての役割を担っていたこと、書記された物だけでなく時には「声」や心中の詠もまた「奉納」と成り得る（時には「書く」ことよりも重要な媒体であった）ことを指摘した。さらに、このような奉納和歌の史的展開をおさえることで、個人の寺社奉納和歌や貴顕の参拝に付随する大規模歌会が、従来の奉納和歌史の空白部分に位置づけられることを明らかにした。また、人々が神仏に和歌を奉納するのに応じるように、神仏から人々への和歌も記されるようになっていった。このような記述の背後には、奉納和歌が本当に受納されるのかという人々の懐疑があり、その懐疑の払拭のため、そして奉納の実効性を保証するために、神仏の応答が必要とされだすのだと結論づけた。

第二節・第三節では、奉納百首の始発に位置づけられる『寿永百首』について考察した。『寿永百首』が賀茂社奉納のために編纂されたことは早くから知られていたが、百首らしからぬ構成から従来の研究では私家集とほぼ同一視されていた。しかし、奉納という観点

から再度見直してみると、通常の家集には見られない贈答歌の選択や和歌の排列が見られることが判明した。第二節で取り上げた『経盛集』では、経盛自身の詠歌の力量が最も引き立つように他人詠が配置され、奉納意図――危機的状況に陥っていた平家一門の救済――に即した排列が試みられていた。第三節の『長明集』に関する考察では、従来長明の「ひ弱さ」が露呈した述懐歌とそれを窘める年長者・鴨輔光の返歌と解されてきた贈答歌を、奉納という意図から読み解き直し、述懐歌群の中に他人詠（鴨輔光の歌）を巧みに配することで長明の願望が高望みなどではなく同じ一族の人間からも承認され得るものであること、そしてそれを賀茂の神に訴える意図があったことを指摘した。

第二章では「天神仮託歌集」とよばれる作品を取り上げた。従来の奉納和歌では人々が神に奉る歌だけを「奉納」と捉えてきた。しかし、第二編第一章第一節で示したように、人々の奉納和歌と対応するように神仏からの詠歌が存在した。応制和歌で帝と臣下の歌が対になるように、奉納歌と神仏の託宣歌もまた対になる。奉納歌と託宣歌の双方を見ることで奉納和歌の全体像を把握することが可能となろう。第二章では、最も人々に親しまれ、多くの仮託和歌を残す「天神」に着目し、作者を天神に仮託する「天神仮託歌集」がどのように生み出され、生成の背後に人々のどのような信仰が存するのかを考察した。

第一節では「天神仮託歌集」のうち、貞治元年（一三六二年）神託により発見されたという伝承を持つ百首「貞治元年神託百首」が形成される過程を検討した。「貞治元年神託百首」には形成の核となるような史実や和歌が存し、それらを調査することにより本来は北野社等に奉納された和歌が天神の百首へと変形・再構築されたものだと結論づけた。そしてそのような和歌が創造される背後には、神仏への贈歌である奉納和歌に対し、神仏の応答の和歌が希求されるようになったのではないかという見通しを述べた。これまで「天神仮託歌集」の由来は明らかでなく、内容もいかがわしいものとして和歌研究の対象とはみなされなかったが、平安末期から盛んになる天神信仰の一端を示すものとして、今後検討されるべき問題であることを提起した。

第二節では、第一節でとりあげた「貞治元年神託百首」の最善本と考えられる実践女子大学山岸文庫所蔵の『天神百詠』について紹介し、書誌や他本との比較状況を記し、百首和歌発見譚を備える最善本と呼び得る本であることを指摘し、全文の翻刻を附載した。

百首和歌という詠作形態は応制百首にしろ奉納百首にしろ、通常の和歌とは異なる、やや改まった詠歌形態として意識されていた。それゆえ、一首一首の和歌をどのように詠むかという「詠者」としての配慮だけではなく、百首の和歌をどのように配するかという「編

者」としての力量も問われる作品であった。そのような「詠者」と「編者」の立場が交錯することで羇旅歌のような新たな題詠の表現の方向性が見出だされ、「短歌」を初めとする述懐の方法が模索されることとなった。また、応制百首と奉納百首、仮託百首を総合して検討することにより、上位者（帝や神）と下位者（廷臣や人）の関係が下位者から上位者への訴嘆という一方通行なものではなく、和歌を通して上位者もまた下位者に呼びかけ求心力を生みだそうとしていたこと、そのような上位者の呼びかけに応じるように下位者もさらに和歌を奉献するという双方向の交流が確認できた。とりわけ崇徳院の『久安百首』は〈帝〉が廷臣に和歌でどう応じるかという問題を生み出した。『寿永百首』生成の基盤となっていたのは賀茂神の奇瑞と所願成就を約束する宣誓歌であった。「天神仮託百首」は、人々の天神信仰に応じて誕生したものであり、和歌を詠まなくとも天神の和歌を信奉すれば神の加護があると約束することで、人々のさらなる信仰をかき立てる役割をもっていた。

応制百首も奉納百首も下位者が上位者へと奉るものというだけでなく、上位者と下位者が相互に和歌を以て交流していた。このような相互に和歌で〈応じる〉関係こそが中世百首和歌を最も特徴づけるものであると考えられるのである。